

1、行書 対聯

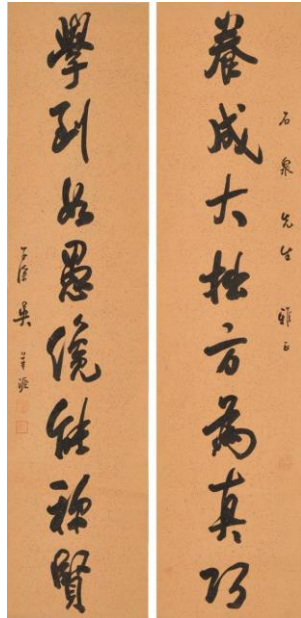
呉華源 ごかげん

制作年不詳

呉華源(1893〜1972)名は原。字の華源が通行する。別字子深。号漁村。江蘇蘇州の人。193〜40年代に呉湖帆や呉徵、馮超然らとともに“三呉一馮”と称された。1966年台湾芸術学院教授となる。山水は董其昌に学び、竹石は北宋の文同を師とした。

養成大拙方為真巧
学到如愚儂能稱賢

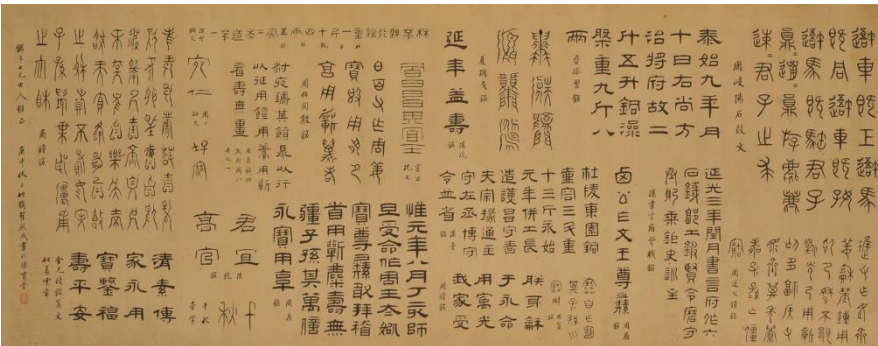
石泉先生雅正 子深呉華源



2、臨金石銘文横披

てききせい
翟熙成

翟熙成は生卒年不詳。
制作年は1920年を想定したが、
或いは60年前の1860年かもしれない。
臨書した銘文は20種類に及ぶ。

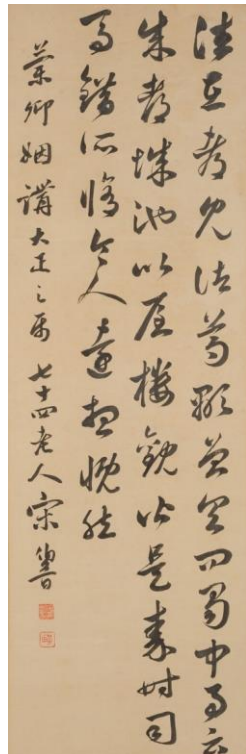


3、草書臨王羲之成都池帖軸

宋伯魯 そうはくろ

1927年

宋伯魯(1854〜1932) 陝西省醴泉県の出身、三十二歳で科挙に及第した。1898年の戊戌政変以降は、詩と絵画の制作に打ち込み、絵画は清時代初期の王時敏の画風を学び、瀟洒な山水画を描いた。書は蠅頭小楷(粒の小さい楷書)を得意とした。本作は、ゆったりとした運筆で、抑揚を控えめに書いている。七四歳作品。

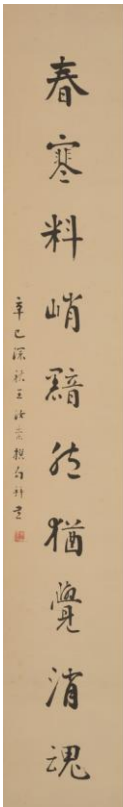
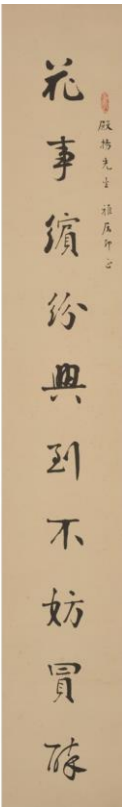


4、行書 対聯

おうじよすう
王汝崇

1941年

王汝崇(1875?〜1963?) 字は俊厓、江蘇無錫の人。清末から民国初期に活躍した。收藏を好み、早年に欧陽詢を習得し、中年に顔真卿に転じ、晩年は《千字文》《書譜》を好んだ。
人柄は温厚で聡明であった。書に巧みで篆、隸を得意とし、篆刻にも才能を発揮した。飲酒を好み、禅の気風を喜び、同時代の文人僧・李叔と親交が深かった。

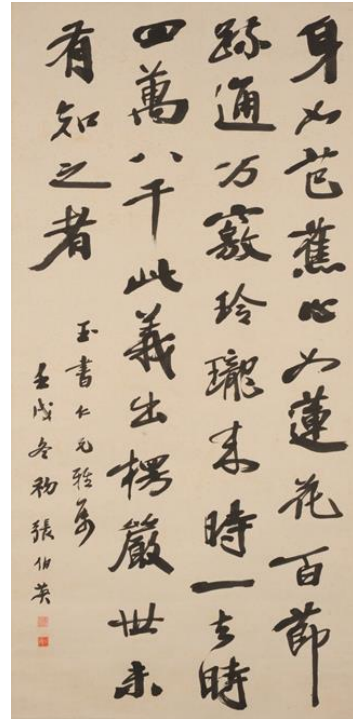


5、行書軸

張伯英 ちようはくえい

1922年

張伯英（1871～1949）清末から中華民国に至る間の著名な書家の一人。近代書壇にも大きな影響を与えた、即ち傅增湘、鄭孝胥、華世奎らとともに当時の四大家と称された。その淵源は北魏碑にあり、用筆は方筆円筆の双方を備え骨力も充実していた。



6、行書山谷題跋蘭亭軸

邵章 しやう

1939年

邵章（1872～1953）浙江杭州の人。黃庭堅が定武本蘭亭序の拓本に附した跋文を臨書したもの。細太の変化に富み、王羲之書法を継承した典型的な帖学派書法である。右肩上がりでもバランスがとれ、整った書きぶりである。

大意は「蘭亭序は優れた書で南朝の宋・齊以来、士大夫の間で受け継ぐ。唐時代に太宗の求めで虞世南・褚遂良が模本を作るも、今となっては定武本の拓本がもっとも王羲之の筆意を伝えるものだ」



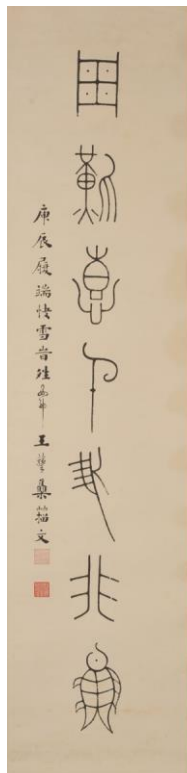
7、甲骨文對聯

王蘊章 おうんしやう

1940年

王蘊章（1884～1942）字は西神。1924年の北京政変後、上海に居し、大夏・交通・光華・同済などの各大学の教授を歴任し、後、正風文学学院院长兼教授、商務印書館編輯、「新聞報」主筆、維新政府実業部秘書兼実業報主筆、南京中国文芸協会理事を歴任、奮商社の社員であった。

詩に工で、周頤・朱祖謀・徐珂・邵瑞彭らと親交があった。また、書法は晋唐宋の楷草隸篆の源流を学び、また小楷にも長じた。



若乃危齋造遺俯瞰龍隄絕磴遙迤斜臨
鴈水近對青城之巖遙瞻赤里之街雲榭
參差星橋縈暎於是分巖列棟架壑疏基
窈窕陵空徘徊罩景松吟竹嘯共寶錄以

諧聲月上霞舒與璇題而竝色仙花祕草
冬夏開榮擾獸馴禽晨昏度響諒息心之
勝境毓道之淨場乎而以九部微言三界
式仰緬惟法盡將醫龍官揮兔豪而匪固

籀象細而終滅未若鐫勒名山永昭弗朽
遂於寺北巖上刻石書經窮多羅之祕藁
盡毗尼之妙義縱洪濶下注巨火上焚俾
此靈文永傳遐劫豈直迷生之類觀之而

發心後學之徒詳之而悟道既而清猷遠
暢峻業遐昭遂簡宸衷乃紆天綬退赴京
邑止大慈恩寺與玄奘法師證譯梵本奘
法師道軼通賢德隣將聖

法師道軼通賢德隣將聖
西晉書
又見於家碑書

8、臨道因法師碑四屏

蕭 蛻 しょう ぜい 1928年

蕭蛻（1863〜1958）
字は蛻公、号は退暗。

老年には蘇州に住んだ。
後出の沈尹默と並んで
近代中国書壇の代表的存
在といえる。

9、行書七言詩軸

黄樹仁 こうじゆじん

制作年不詳

字は静園、上海出身の秀才で、
科挙の補欠生として拔擢され
た。書に巧みで、また篆刻も能
くした。呉昌碩らが参加した
『豫園書画善会』にも加盟した
ことがあり、呉昌碩、楊逸、朱
祖謀ら多くの芸術家と交流し
た。

10、隸書五言對聯

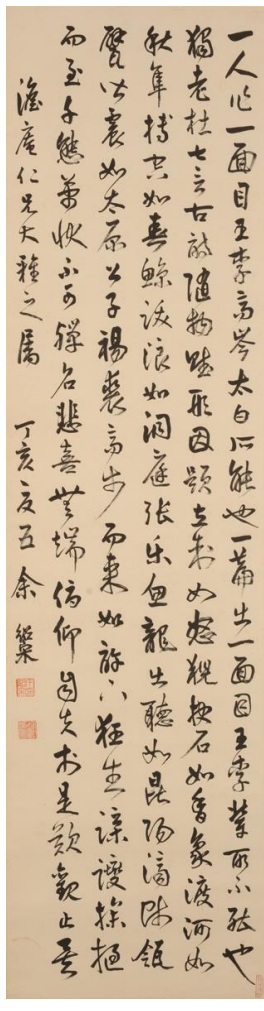
袁克文 えんかつぶん

制作年不詳

袁克文（1889〜1931）民国初代總統・袁世凱の次子。字は豹
岑。中国河南項城の人。民国四公子の一人に称される。書法絵画に精
通し、詩詞歌賦もよく作り、古玩や古書画の収集も多かった。後に袁
世凱が帝を自称することに反対したため、その怒りにふれ上海に逃れ
た。上海在住中にも多くの書画を遺した。



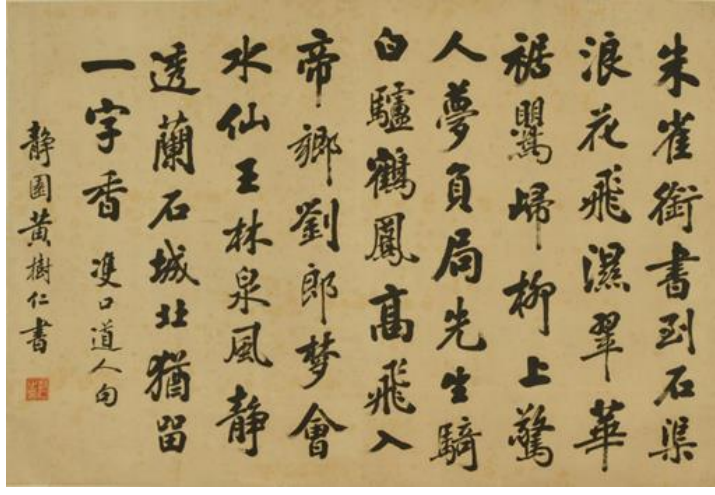
樓迴心常定
笙寒以再聞



11、行書軸

余紹宋 よしょうそう 1947年

余紹宋（1883〜1949）字は越園、号は寒柯、浙江省の人。清末
に日本の法制大学に留学、卒業後帰国し外務部主持の任につく。司法
関係の職を歴任するも圧政に抗議し職を辞す。後に杭州で売画生活を
送る。1943年に浙江省通志館館長。収蔵に富み、山水画をよくし、
刻印も巧みだったとある。『書画書録解題』他、数冊の著作を紹介して
いる。



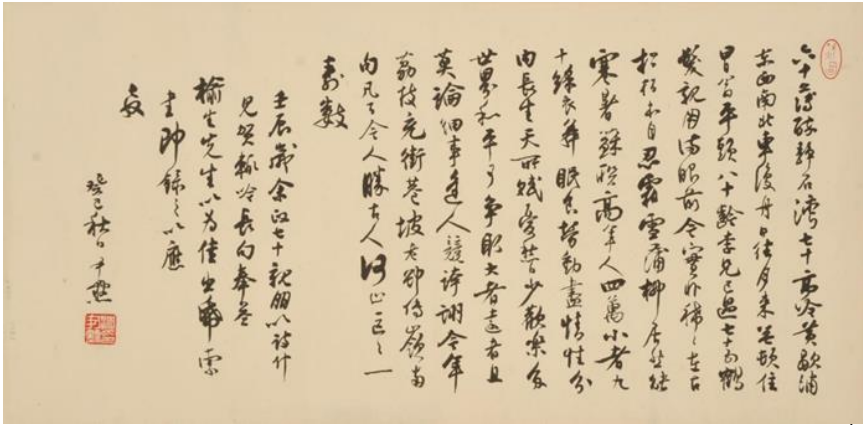
静園黄樹仁書

12. 行書 横披

沈尹默 しんいんもく

1953年

本作は、民国41年（1952）、沈尹默70歳の年に、親しい友人たちが詩集を作ってお祝いに来てくれたことに対し、沈尹默が返礼として長句（七言詩）を吟じた。『その中でも「榆生先生」へのお返しとして作ったものが良く出来ていたので、紙を出され書くように頼まれた。その求めに応じてこれを書いた。』と跋語に述べている。



13. 行書 李白詩 白馬篇軸

沈尹默 しんいんもく

制作年不詳

沈尹默（1883～1971）本名は沈君黙。原籍は浙江省興。

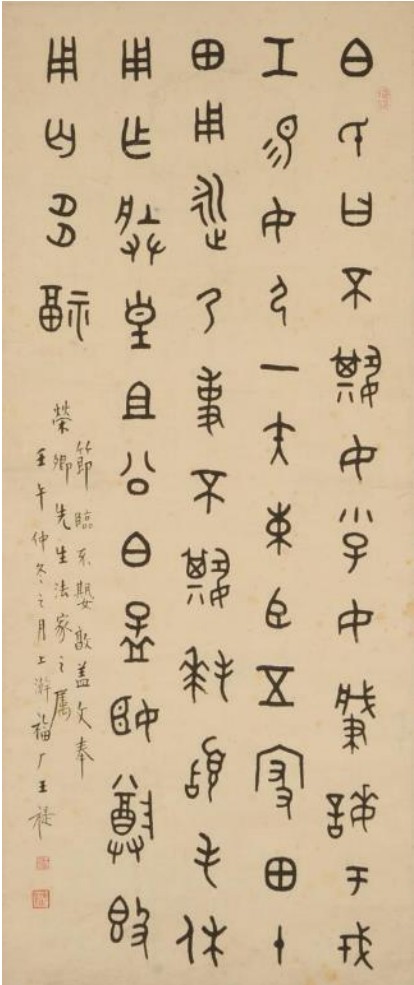
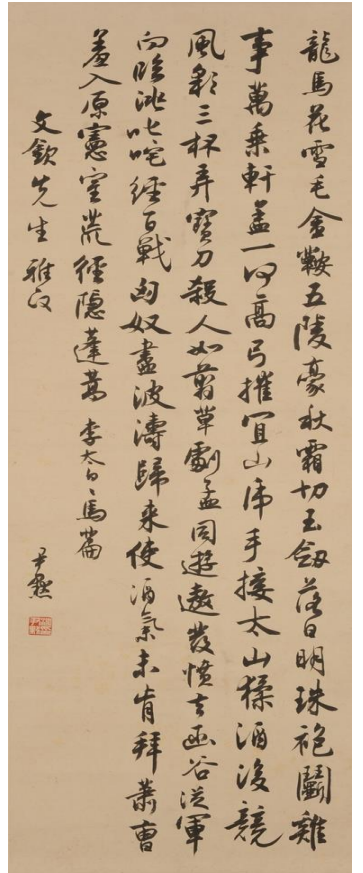
書家。1917年北京大教授、1921年に京都大学に留学し、1932年北京大学学長に就任。現代筆墨会の旗手といえる。

14. 篆書 臨不き敦蓋銘軸

王禛 おうしん

1963年

初名は寿祺。字は維季。号は福厂（庵）。浙江杭州の人。光緒30年（1904）西泠印社の創設に際して、大いに尽力した。解放後、上海中国画院の画師となる。書は楷隸篆書にたくみで、篆刻をよくした。また蕃印を喜び、自ら印傭と称した。『福厂藏印』『麋硯齋印存』などを編集した。



15. 唐人諧語行書軸 啓功 制作年不詳

啓功（1912～2005）字は元白。北京市の人。中国当代著名教育家、古典文献学家、書画家、文物鑑定家、詩人として有名。国学大師。滿族、本姓は愛新覺羅氏である。清世宗（雍正帝）の第五子である和親王弘昼の第八代目の子孫にあたる。著作は多く、北京師範大学教授を歴任する。故宮博物院顧問等要職にあつた。

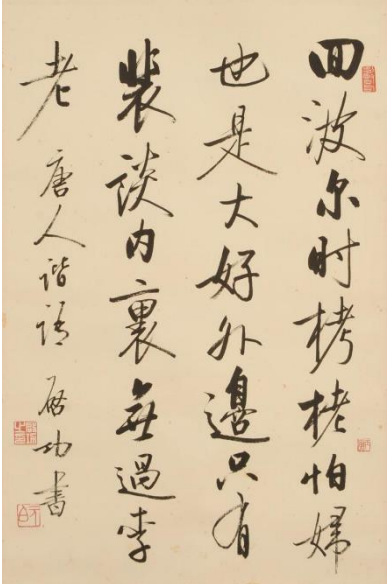
本作は、唐時代の夫婦にまつわる戯歌で、おそらく婚姻の祝いに贈つたものと思われる。

「回波爾時栲栳怕婦
也是大好外邊只有
裴談內里無過李
老 唐人諧語 啓功書」

回波爾時栲栳
（決まり文句で意味はありません）
恐妻家でもいいじゃないか 外じゃ
裴談どのが一番で 内じゃ李の旦那
にかなわない

唐の中宗時代、朝政は韋皇后に牛耳られていました。ときに裴談という大官僚がおり、彼は有名な恐妻家（怕（は）婦（ふ））で、「妻には三つの恐ろしさがある。若いときは菩薩のようで、子が生まれると鬼子母神のようで、年老いて化粧が乱れると鬼のようになる」という程でした。あるとき宮中で宴会がありました。その席上、道化が即興の替え歌で恐妻家の裴談をからかいます。

中宗の名前は「李顯」、つまり「李老（李の旦那）」とは韋皇后に頭の上がない中宗のことでした。これを聞いて一番喜んだのは他でもない韋皇后で、道化に褒美をあたえたのでした。

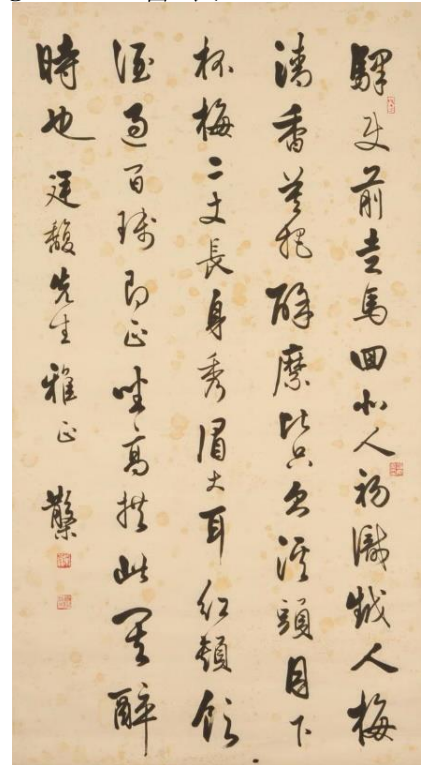


16. 行書軸

鄧散木

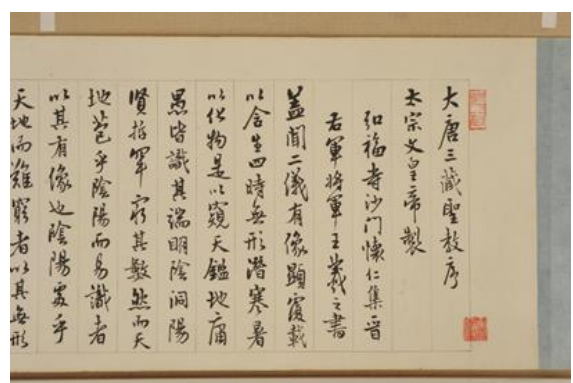
鄧散木（1898～1963）は、近代中国を代表する篆刻家・書家。号は散木のほかに龔翁・一足など奇怪なものをもちいました。

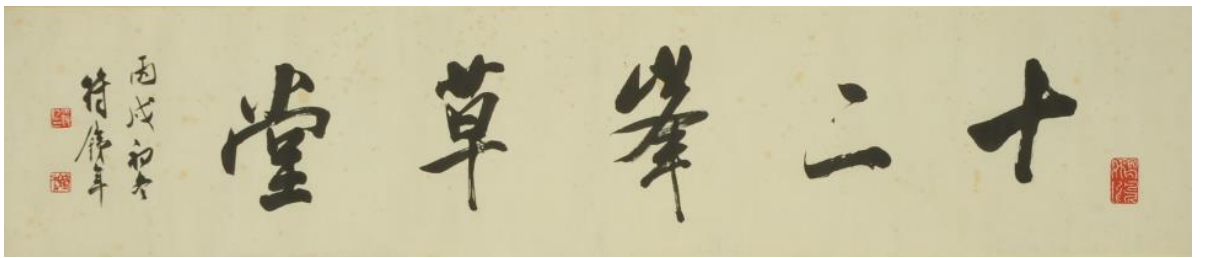
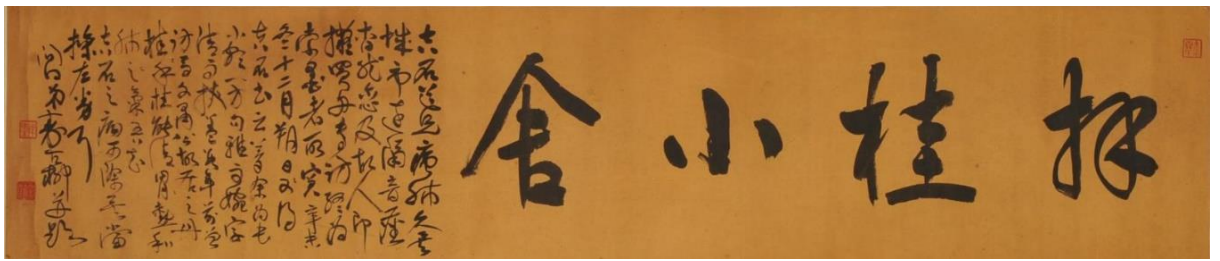
篆刻は趙古泥に、書は蕭退闇に学び、ともに江蘇常熟の人であつたので「虞山弟子」とも号する。その上で封泥や陶文などを規範として人に左右されない独自の篆刻芸術を構えた。書の隸書は張遷碑を、行書は章草を基礎とし、晩年は王羲之や柳公権に師法した。



21. 行書臨集王聖教序橫披

鄧散木 1940年





17. 行書堂号横披

秦古柳

↑上

1931年

(生卒年不詳)

絵画が得意で本館には、写実的な「新年大吉図」と故事画がある。山水画も良くした。本作は知人のために、堂号名を揮毫したもの。日常の行書体とは違った端正な書きぶりである。

20. 行書横披

符 鋳

1946年

符 鋳 (1886~1947)

字は鉄年、号は瓢庵、別署閑存居士。祖先は湖南衡陽の出で、広東潮州で生まれた。

晩年は上海に住んだ。幼少期から書名があり、少年期には詩や文章を書いた。絵画も得意とした。特に山水、老松は気品があり優れている。

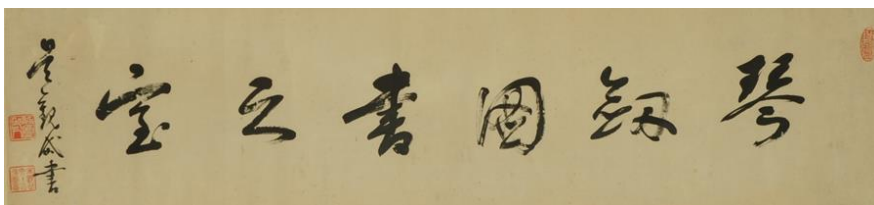
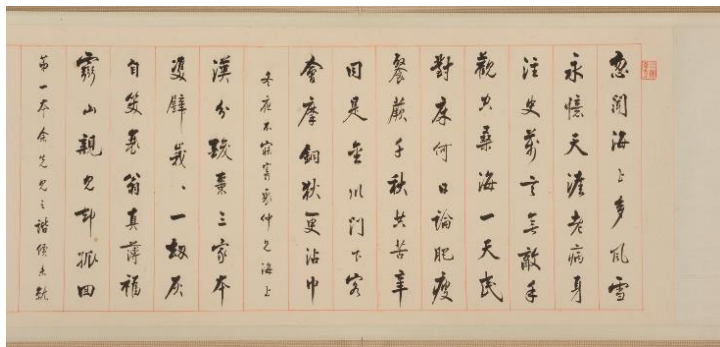
18. 行書卷

冒広生

1939年 左上

冒広生(1873~1956)字は鶴亭、号を疾斎とした。江蘇如皋の人。中国近代文化史にとつて重要な人物とされる、新中国成立後の要職を歴任し、文革中も放逐されることはなかった。書は

新旧の書風を調和させて知的な印象を作り上げている。



19 行書横披 吳觀岱

1920年代

吳觀岱(1862~1929)

初名は宗泰。字は 觀岱、またの字は念康。号は潔翁、漁陸散人、觀道人など。齋号は存融草廬。四十歳以後は字の觀岱を名とした。江蘇省無錫の人。

小さい頃から商店で働きながら書画を学んだ。北京の收藏家廣泉(1868~1932)にその人柄と画名を知られて北京に迎えられ、

廉氏收藏の書画や故宮の歴代書画を見、古画を学んでから、画技が著しく進んだ。本作は依頼により書齋名を揮毫したものである。「琴劍圖書之室」